

天 界

第九十三號 (第九卷)

昭和三年十二月



〔此の頃の話題〕

火星が来る。 二年ぶりだ。しかも今度は我が日本の頭上にやつて来るんだから、素人も玄人も、寒い空を堪へ忍んで、天からの消息を待ちこがれてゐる。十二月中旬の彼我最近距離は二千二百萬里。視直径は16秒角、光度はマイナス一等半。——火星の世界は今が春分の時節で、北極地方には最大形の純白な極冠が輝やいてゐる。

おほろそか
大晦日の夜、八時過ぎ、火星が一恒星を掩蔽する。これも十何年ぶりの珍景であるから、是非、見ねばなるまい。但し、これには10センチ以上、又は300倍以上の望遠鏡が必要である。

太陽黒點活躍の頂上 がやつて來たらしい。『本年五月頃か?』と傳へられた豫想が多少はづれた。七月八月九月と、黒點數は漸次増大しつつある。しかし何時までも此のまゝでは進むまい。峠は此の年末か? 來年初頭か? ——北海道では去る十月、オーローラが見えた!

彗星界が淋しい。 今年は年初から僅かに二つ見えたきり、其れも去つた。歸來する筈のホームスも、テイラアも、遂に來ないのか?

恒星にも流星雨が降る。 シャブレイ教授が最近發見の奇説である。しかもこれが恒星のスペクトル分析によつて檢出されたんだから、とても太陽や地球に落ち込む數の比ではあるまい。面白い世の中だ。——直径が測られ、温度が測られ、流星が落ち込む。恒星も此うなつては隣り近所の「おぢさん」格だ。